ハーレム・ルネサンス短編小説 2

Eric Derwent Walrond——カリブの島の語り部

岸本 寿雄

Eric Walrond（1898-1966）は、アメリカ生まれではないが、ハーレム・ルネサンス期に短い年数ではあるが、短編小説家、編集者、ジャーナリストとして大きな足跡を残した。ウオルロンドは、イギリス領ギアナのジョージ・タウンに生まれ、バラバドス島のSt. Stephen's Boy's Schoolとパナマ（コロン）のCanal Zone Public Schoolで教育を受けた。その後1916年からCresttobalのHealth Departmentや*The Panama Star and Herald*で、働いたが、1918年にニューヨークに渡り、City College of New YorkやColumbia大学で学んだ。学びながら最初に*Brooklyn and Long Island Informer*で、次にカリブの島ジャマイカ出身のMarcus Garveyに一時同調し*Negro World*のスタッフとして働き、1922年頃から*Opportunity, The Smart, The New Age, Saturday Review of Literature*等に短編小説を投稿するようになった。1925年から27年の間オポチュニティー誌のビジネス・マネージャーを務め、1926年Boni & Liverlight社から、短編集*Tropic Death*を出版、カリブ諸島の文学でHarlem Renaissanceに貢献している。

特にウオルロンドは、コロンビア大学の創作科で短編の才能を伸ばし、将来が期待されたが、1928年Guggenheim FellowshipとZona Gale Scholarshipを受け、パナマ経由でニューヨークを発ち、ヨーロッパを旅行、1934年までフランスで生活したが、結局ロンドンに落ち着き、その後一度もアメリカに帰ることなく、1966年そこで他界している。

(1)

ウオルロンドの短編小説の題材はパナマのパナマ・ゾーン、バルバドス、ジャマイカ、イギリス領ギアナというカリブの島々からである。そこで取り扱われている人々はスペイン系の人々、インド人（カルカッタ）、中国人、ネイティヴ、白人の支配者、クレオール、その人々の間に蠢く黒人とその混血、貧民者側のクレオールである。これらの貧しい人々の生活を美しい夕方の背景、夜明けの背景を通して、時には民話風物語を交えながらリアルに描いている。

土着性を持つという意味から、同じように短編小説を書いたジーン・トゥーマーの*Cane*と比較され、時にはカリブ海のジャマイカ出身のクロード・マッケイの*Banana Bottom*、彼の短編*Ginger Town*とも比較される。確かにアメリカ南部の白人の支配下で苦しむ黒人や混血を詩的に描いたという点でトゥーマーに似ているし、カリブの色濃い物語と民話的要素から比較するとマッケイに近いとも言えよう。

カリブの島バルバドスの物語群の最初の"Drought"では、ギターを弾く陽気なバルバドス島に住むCoggins Rumの家族の物語である。この地方に旱魃が容赦なく襲う。池も川も干上がり、畑の作物もほとんどが枯れてしまう。池の蛙は悲しそうに鳴き、ラム家には食べる物すらない。土着の者は、神に祈り、雨乞いをするが、天からは雨の一滴すら降ってこない。

家族の全員が黒色をしているのに、Cogginsの犯した罪により娘のBerylleだけは黄色い皮膚をしている。ラム家には物を買う金すらなく、6歳のベリルは父の注意にも耳を貸さず、空腹を満たすために石灰を食べる。石灰は身体に吸収されること無く、唯腹だけを膨らまし続け、終にその幼い彼女の命を奪う。ラムの奏でる音楽はより一層切なく響く。ある意味では人間の罪に対する自然の大きな復讐と言える。

"Panama Gold"は、西インド諸島の女性農民Ellaの物語である。エラは、バルバドス島で一人自立して生活している。彼女は小屋の北側に5年前ココナツを植え、今ではそれが繁茂している。エラについてウオルロンドは次のように描いている。"Ella was a mulatto, with plenty of soft black hair. She didn't need a cloth twisted and plaited to form a matting for her head."[1]

ここに描かれている女主人公エラもまた混血である。一方パナマ運河で働き、片

足を失うが、アメリカ黒人ではなく、イギリス国籍であることを主張し、其の補償金でバルバドスの町でストアを経営しているMr. Poyarは、黒人である。彼はエラが買い物に行くと親切にしてくれる。ある日、ポーヤーの店から出火、それを知ったエラは例の柔らかなふさふさとした頭の黒髪に、バケツ一杯の水を乗せ幽霊が出るという石ころの石灰の道を、熱波で暑くなったのをもろともせず、"Zim, zam, Zim, zam"[2]と、力強く、確りとした足取りで急ぐ。だがポーヤーの店までやって来ると、彼は片足のために逃げ遅れたか、担架で運ばれている。やっとの思いで持ってきたバケツの水も無駄であったことに気づき、呆然と立ち尽くす。

Panama Goldというタイトルは、一つにはパナマ・ゾーンで白人の性的慰めの結果としての混血、即ち金色のエラの皮膚の色を象徴し、二つ目にはバルバドス島の夕方の風景そのものもゴールドあり、それをも象徴している。

> The western sky of Barbados was ablaze. A mixture of fire and gold, it burned, and burned——into one vast sulphurous mass. It burned the houses, the trees, the windowpanes. The burnt glass did amazing color somersaults——turned brown and gold and lavender and red. It poured a burning liquid over the gap. It colored the water in the ponds a fierce dull yellowish gold.[3]

パナマ・ゴールド色をしたエラ、夕方には黄金色に染まる美しいバルバドス、風景と人物の一体化、そこに展開される悲しい物語がより一層切なさを伝える。さらに彼女の歌が彩りを添える。

> Gay, lonely girl, her bare arms yellow in the blazing February sun, the words of a West Indian madrigal issued from her lips:
>
> Do Mistah Bee don't chase me 'way
> Fo' de gals nex' do will laugh at me

Break me han' but let me stan'

Break me han' but let me stan'....[4]

(2)

ウオルロンドの物語の舞台は、比較的パナマ・ゾーンの物が多い。"Subjection"は、*Tropic Death*には、唯一の権力への反抗の形を取っている。Balletは、パナマ・ゾーンを領有するアメリカ海兵隊の下で、土方として働いている。この若い黒人は、ここを支配する者への反抗心が目の底で燃えている。この地域には、黒人、トルコ島、セント・ビンセント島、バハマから働きに来た人々が、鶴嘴を歌の調子に合わせて振り下ろす。"Diamond gal cook fowl botty giv' de man."[5] 労働者の中には少年も混じっている。激しい労働に少年は付いて行けない。それを見たバレットは、海兵隊員に"Why——wha' you doin'? Yo' don't know yo' killing dat boy, ni?"[6]と、大声を張り上げる。それに対して海兵隊員は"You mind yer own goddam business, Smarty, and go back to work."[7]と、厳しい口調でやり返し、バレットは要注意人物となる。

スパニッシュ・タウンで夜更かしをしたバレットは、母親が再三起こしても、起きることが出来ない。やっと起きても正体のはっきりしないバレットに母親は"Ungrateful vagabond! Dah is wha' Ah get fo' tyin' up my guts wit' plantation trash, feedin' unna——jes' lik' unna wuthlis pappy. But yo' go long an' bring me de coppers when pay day come. Dah is all Ah is axin' yo' fo' do."[8]と、厳しく諌める。渋々出かけるバレットに家事手伝いの15歳のBlancheは、彼を親切に扱うと共にJohn Chinamanに注意するようアドバイスを送る。

やっとの思いで海岸まで辿り着くと、一行は既に対岸のToro Pointに向かおうとしている。友の"Bellet, bettah don' go t' wuk teeday——"[9]とのアドバイスも理解できないうちに、海兵隊員に強制的に船に乗せられる。乗船してみると、指揮官の大尉は手にピストルを持ち、乗船させられた人々は無言である。海兵隊員に追い立てられ、労務者の一隊は、トロ岬からPainted Cityに向かう森の伐採を命じられる。ベルトにピストル、手にライフル持った昨日の海兵隊員がバレットを見張っている。

彼の凝視に疑問と恐怖を感じていたバレットは、海兵隊員が声を掛けるや否や、その場から逃げ出す。労務者を掻き分けジャングルの小屋に逃げ込むが、終に追っ手によって射殺される。Canal Recordには次のように報じられている。

> In the Canal Record, the Q.M. at Toro Point took occasion to extol the virtues of the Department which kept the number of casualties in the recent native labor uprising down to one. [10]

1901年、アメリカは巧みにイギリスを抱き込み、戦略上の経営拠点を築くためHay-Pauncefoti Treatyを成立させた。1903年には独立運動のパナマ人を利用してパナマ・ゾーンの領有権を獲得し、パナマ運河建設に着手した。そこには金を稼ぐために、カリブの島々から貧しい人々が集まった。アメリカの其の地方の支配と開拓は公然と行われ、貧しい弱い人々が其の犠牲となった。この引用は殺人行為を暴動と摩り替えたアメリカのやり方を巧みに皮肉っている。

パナマ物語群の第二"Wharf Rata"では、過ってイギリス、フランス、オランダに、現在はアメリカに支配され、イタリア、ギリシャ、中国、黒人が入り混じるカリブ海に面するパナマのコロンが、其の舞台である。Jean Baptisteには、最初の妻との間に黒人で美男子のPhilip、ずる賢い次男のErnest、そして新しい妻との間に出来た8歳のSandelがいる。其処に養女として家事を手伝うMaffiが住んでいる。マフィーは土着のスペイン人と見間違えるほど美しいCholo Indianの女性である。

フィリップはマフィーを愛しているが、それに気づかないマフィーはフィリップの友達でコロンの半分中国人の血を引く金持ちの息子San Tieを思い続けている。放浪癖のあるサン・ティーがCoco Téに帰ってくることをフィリップがマフィーに告げると、彼女はサン・ティーとの夢に耽る。フィリップとアーネストは波止場ゴロで、外国船が入港すると、沖に小船を出し、外国人にコインを海中に投げさせ、それを海中から口に咥えて浮上することで、外国人を喜ばせながら金を稼いでいる。

ある日、マフィーはフィリップにサン・ティーが、彼女のことを思っているかどうか尋ねた時、彼女のことを愛しているフィリップは、サン・ティーが彼女を愛して

いると嘘をつく。Coco Téに帰ってきたサン・ティーが彼女の元を訪れないことに不信を持った彼女は、フィリップに真偽のほどを問い質す。フィリップが嘘をついていたことを知ったマフィーは、絶望のあまり海に向かうが、フィリップに探し出され、慰められ、自殺を思い留める。

フィリップとアーネストは例の如く、小船を出し海中に潜る。だが金貨を探しているうちに、大きな鮫がやってくる。流石に泳ぎのうまいフィリップも力尽き、鮫の餌食となる。夜明けと共に何も無かったように美しい朝とマフィーに静けさが訪れる。

> At Coco Té, at the fledging of the dawn, Maffi, polishing the tinware, hummed an *obeah* melody
>
> > Trinidad is a dawn fine place
> > But *obeah* down dey ....
>
> Peace had come to her at last. [11]

貧しさのために外国人の投げるコインを目指し、鮫の餌食となる。人間世界の残酷さと自然の厳しさ、それと対照的な自然の美しさ。さらにマフィーは、自分を本当に愛してくれた人のことを知らないままに、日常生活に戻り、平静が訪れる。その描写は死んだ人への悲しみを言外にしみじみと伝へる。

パナマ物語群第三の"Palm Porch"は、Miss Bucknerと其の娘たちの物語である。ミス・バックナーの出自はあまり明確ではないが、60歳、7フィート、髪は黒く、混血で落ち着いて魅力と用心深さを持っている。彼女がパーム・ポーチの所有者で、其の屋敷は豪華な部屋に分れ、それぞれの部屋がポーチに面し、鎧戸が付き、各部屋にはワインが用意され音楽が流れる。慰安所風にではなく、サロン風に工夫されている。ミス・バックナーには7人の娘が居たが、其のうち二人は彼女の気に入ら

ない人と結婚し家を去っている。このポーチには外国の高官、土地の有名人が訪れミス。バックナーがホスト役を務め、残りの五人の娘が客の相手をする。

ミス・バックナーは、かつてこの地方が沼地であった頃から住んでおり、白人が訪れて以来、機械力によってこの地域が変貌してしまったことを嘆いている。更に現地人は低給で、白人でさえあれば給料が2倍支払われること、Niggerは銀であり、白人はいつも金であることを思い知らされている。セイラー、キャプテン、百万長者、領事が今日も訪れる。副領事相手の娘Anestaは、アメリカ人嫌いで、ミス・バックナーは、色々な人を相手にしながら自分の昼食にはスフレにするかカスタードにするか一生懸命考えている。

ミス・バックナーの混血は、再度の繰り返しになるが白人支配のシンボルである。だが彼女の仕事は白人を利用することである。ポーチの経営からかなりの金を儲け、経済的にゆとりがあるからこそノスタルジアにしたる事が出来る。娘のアネスタのアメリカ嫌いも動機としては同じであろう。エンディングの皮肉がこの短編にスパイスを与えている。

(3)

この短編集のもう一つの特色に「移動」の物語群がある。最後の民話群と重複するところがあり、"Black Pin"も移動の物語であるが、其処にはObeahの物語が含まれていることから民話群で取り扱う。

"Yellow One"は、夫の生活力の無さから、より良い生活を求めて女主人公が夫と共に、夫の故郷ジャマイカに移動する物語である。主人公の女性は次のように描かれている。"Once catching a glimpse of her, they swooped down like a brood of starving hawks."[12]と、男たちの注目の的である。彼女はスペインの血を引く、ホンデュラス生まれで、"*la madurica*: the yellow one"と呼ばれ羨望され、一方でその姿から侮蔑、敵意の対象ともなっている。カニスターを引きながら手伝おうとする男たちを振り切り、彼女はジャマイカ行きの船に急ぐ。親切にもメスティーゾが彼女の乗船を助けてくれる。船で赤ん坊を抱いた夫のAlfred St. Xavier Mendesと合流する。ハッチが閉まり、船室には激しい船の音と蒸し暑さが増してくる。赤ん坊

が泣くが夫のアルフレッドは、空腹の赤ん坊のミルクを作る白湯さえ貰いに行こうとしない。業を煮やした彼女は、子供を夫の横に寝かせ、白湯を捜しに出る。運良く先程のメスティーゾが厨房で働いていて、白湯を彼女にくれる。快く思っていない他の船員は彼に文句を言うが「Jota Arosemenaに貰った」と言えと心配りさえしてくれる。

船が大海に出ると、彼女の居るデッキには、波が入り込み居場所の確保さえままならない。更に時間が経つと彼女には白湯のことが気に掛かるが、夫は動こうとしない。彼女は再度意を決し厨房に行くが、反感を持った船員の命令で、ジョタが白湯を彼女に渡そうとした時険悪な雰囲気になる。ジョタは彼女を守ろうとするが乱闘となる。彼女は乱闘に巻き込まれて倒れる。ジョタと彼の仲間により医務室に運ばれる。デッキにいるアルフレッドは、夜明けになっても帰らぬ妻を心配する。船からジャマイカのブルーの丘が見えてくる。

ここにも支配者の血を引くyellow oneへの憎悪反感が伺える。一般的には混血であるために、ヒンズーのクーリ、その他の移民に押されて職を失うであろうし、アルフレッドの場合多少本人の性格的問題もあるが、結局押され，職を奪われ、移動することを余儀なくされる。不幸にも彼女の場合、混血のジョタを蔑視する人から同類と見做され、暴力と憎悪の犠牲者となる。アルフレッドのミドル・ネームにはSt. Xavierとあるが、ザビエルは、有名な伝道者の名前である。その名前を有するアルフレッドが怠惰であるのは、カリブ海でのキリスト教の不毛を暗示させているのであろうか。

ジョタの乱闘の相手Hubigonは次のようにyellow oneを考えている。

> Hubigon despised him because he was yellow-skinned ... sure he was a "yallah" nigger——drinking *anee* in a high-hat café on the prado which barred jet-black American Negroes ... He envied Jota his Cuban nationality for over and over again he had observed that the Latin was the nearest thing to a white man the *ofey* men aboard had yet met.[13]

美しさの故の嫉妬、黒人であるというよりラテン系で白人に近い存在であることから憎悪されるYellow oneは、白人支配の明らかに犠牲者である。だがいつも自然の美しさは変わらない、人間の憎悪、死闘を超越し、ブルーの色をしたジャマイカ島は平然としている。

この小説のタイトルと成っている"Tropic Death"も、移動の物語である。男たちは家庭に無頓着で、より良い仕事を求めて移動する。この物語の主人公Sara Brightの子供Geraldは、父親の移動の結果取り残された者で、Yellow-Brownで8歳、母は黒人、今二人はバルバドスの島からパナマのコロンへ父親探し出発しようとしている。彼は島に住む人々とは異なり中流階級のビクトリア風の服装をしている。

コロンでは、貧しいスラム、赤線の町Bottle Alleyに住む。そこは雑音、塵、貧困、病気、暴力、セックスの町である。ジェラルドも母も結局その町に住む以外生きる道は無くなる。貧しさのためサラは頻繁に教会に行く、そこにしか彼女には救いが無い。ジェラルドも連れられて行くが信仰心は無い。父は荒れた生活を送り、病に冒されている。

ある日、ジェラルドは従業員の帰った店で、父が一人赤く爛れた腕をまくり其の皮膚を爬虫類に食べさせているのを目撃する。父はらい病に冒されていたのだ。その後腕の痛みが激しくなるにつれて、父Lucianは寝こみ勝ちとなり、店の経営権は他人に渡る。医者の処方箋、サラ、ジェラルドの祈りもむなしく父は苦しみながら他界する。

白人に支配される植民地で見られるものは、支配する者、支配者から利益に預かる者、そして徹底的に搾取される者のパターンである。主人公ジェラルドは、父と同じYellow Brown。父ルシアンは "He was soft, yet not fat, but he gave one the appearance of being weak and flabby ... He was bald, and his mouth was large and sensuous."[14] と、描かれている。この描写は転落してゆく者の姿を投影している。主人公ジェラルドも土地の黒人が遊んでいる輪に入れず、遠くから見ている。彼の父は官能的ではあるが彼の妻（黒人）からキスを受けるのも嫌う、混血のもう一つの顔を持っている。彼の性格的弱さが黒人と結びつくことになるのだが、結局黒人に馴染めず妻子を捨てる。それがより一層彼を不幸に追い込むこととなる。彼の病気

を爬虫類と結びつけるところは、奇妙であるが、ドラマチックな幕切れを用意する伏線となっている。

(4)

*Tropic Death*においては、民話的物語群は、4篇あり、"Black Pin," "The White Snake," "Vampire Bat," "Tropic Death," であるが、"Black Pin,"と"Tropic Death"は、移動物語群で取り扱ったので、ここでは省く。残り2編はタイトルそのものも民話的である。

"The White Snake"の舞台となるイギリス領ギアナは、ポルトガル系、ボルドー(フランス)系黒人、中国人、インド人、所謂黒人が混在して住んでいる。

ボルドー系黒人のSeenieは、ある夜、「白蛇」が自分の体に這い登る夢を見て悲鳴を上げる。SeenieはJack Captainに玩ばれ、彼から逃れてWaakenawの治安判事の下で、使用人として働いている。社会的人間的欲望の結果生まれたWater Spoutを育てる事に喜びを見出している。WaterはObeahの産婆も絶望するほど病弱で、痩せ、食べるものは粥物しか受け付けず、夜には泣いたり、叫んだりする。

ある夜スーニーが小屋に戻ると、Waterは静かに寝ている。スープを飲まそうとすると在るだけの力を振り絞り跳ね除け、飲んだとしても吐き出す。スーニーが、半分うとうとしている頭の中に、此れまで在った日常の些細なことWaterの断片的思い出、熱で死んだ人々、雨水に育った虫等が走馬灯のように循環する。突然現実に戻るとWaterが泣き始める。彼女が抱き寄せると彼は濡れ、無力の状態になり、体は冷えきっている。彼の口に息を吹き込むと、回復し、彼女はまたまどろむ。

再度子供が泣き始める。まどろみの中、まさぐり、手を彼に当てると今度は熱がある。彼は泣き叫び、今彼女の胸に居たかと思うと、次の瞬間床にいて吠えている。彼女が確かめようとするや否や、突然、頭を藁の中に滑り込ませる。次の瞬間部屋の別の隅で彼は大声で叫ぶ。彼女は"Was he a dual being?"[15]と怪訝に思う。スーニーは、子供に飛び掛り、包み抱こうとするが、彼はドアから飛び出し、ギアナの夜の静寂の中に消える。6時間後、サージャントの一行は、海に向かって珊瑚礁の道を、5月の月の光沢をしたミルクで育ったような蛇を引きずって帰ってくる。

物語の恐怖は夜の夢の中、正確に言えば、夢と現の中で始まり、夜明けに事が終わる。蛇そのものが邪悪で、白蛇は更に無気味さを加える。「白色、について言えば、リチャード・ライトの*Native Son*の主人公ビガー・トーマスは雪の世界を恐怖する、其れは取りも直さず白人支配を象徴する。スーニー子供は白人との混血であり、それは罪の子、黒人の側から見ると、滅びる運命にある。更にWater Spoutの名前も象徴的である。水と噴水あるいは噴水孔、ほとばしり出て、消える運命を暗示しているのではなかろうか。最後には熱を出すことから、蒸発の暗示と言えるかもしれない。

"The Vampire Bat"は、ボーア戦争で息子を失い、帰国するプランテーションの所有者Bellon Prout大佐の物語である。大佐の乗っている船が到着寸前、珊瑚礁で座礁する。自分の家にたどり着くためには、ジャングル沿いの海岸を老いぼれ馬で12マイル行かねばならない。途中白人と黒人の混血Mother Cragwellの店に立ち寄り、馬の休息を取る。彼女は夜は動かないほうが良いと何度も忠告するが、夜の12時大佐は店を出発しようとする。其の時一人の女が、恐怖に震えながら店に入ってくる。砂糖キビ畑には黒人が居て、ランタンに悪戯し、さらに持っている傘を右や左に持ち替えさせる悪戯に出会った恐怖を語る。大佐は動じず出発するが、砂糖キビ畑まで来ると宙に真紅の火のボールが舞う。彼の顔は灰色となり、手綱を引き締める。更に進むと黒人の赤ん坊が毛布に包まり捨てられている。大佐は赤ん坊を抱きながら逃げ回る。

翌朝、小屋の中にプラウト大佐の死体が横たわっている。死体は突かれ穿孔があき、体は白く血の色を失っている。土の上のセーム皮の毛布は空っぽである。其の地域にはVampire Batが、飛び交うという。

ここには民話的な血を吸う蝙蝠と白人への潜在的復讐がうまく結び付けられている。プラウト大佐については、プランテーションの所有者、息子をボーア戦争で失ったことしか述べられていないが、プランテーションの所有者は黒人の生き血を吸う蝙蝠であると共に、黒人を夜な夜な白くさせようとの白人の不穏な性的行動があった。その意味で混血のマザー・クラッグウエルは、白人の不穏な動きの結果であり、夜の世界は、「白蛇」と異なり、黒人の世界であり、無謀にも大佐は其の世界をも征

服しようとして、蝙蝠に滅ぼされる。黒人が現実的には成し得ない願望を、民話的世界を使うことによりうまく処理している。

(5)

ウオルロンドが扱う人物は、共通的にはミュラトーの世界で、その意味するところは白人の欲望の結果である。この様な人物を取り扱いながらもウオルロンドは、プロテスト小説に見られるような、奴隷制や差別を激しく攻撃したりはしない。むしろリアルに人物、事件を描くことによって悲劇性を高めている。真昼の太陽は、太陽の下で働く弱者をいためつける、憩いの夜さえ、熱風で痛めつける。さらに重労働と低賃金は黒人や其の混血を生活のための移動を余儀なくさせる。パナマ、ジャマイカ、ギアナ、何処に移動しようとも、其の至る所がTropic Death「死」である。

特にYellow Oneは、少しの例外を除き、土着の黒人の側にも属せず、かえって土着の黒人からは皮膚の色が白人に近いことから、より一層黒人の不満の捌け口の対象となる。白人の側からは、多少の憐憫の情を掛けられるかもしれないが、いずれの側にも自己の所在は無い。ウオルロンドは黒人、混血をリアルに描く過程に、民話的要素を導入する。其れが昼と夜との間、夜と朝の間風景の描写と相俟って、より悲劇性を高める。黄金色、真紅燃える夕日の島々、美しい紫色のしじまを破る朝。リアルなドラマを其の風景がより一層ドラマチックにする。夕日のドラマも一瞬、朝のドラマも一瞬、一瞬であるからこそ其の色合いを鮮やかにする。この意味でウオルロンドはカリブの島々と其の物語を見事に描いた最初の作家であろう。

作家だけの活動に絞れば、ウオルロンドの活躍はほんの5、6年に過ぎない。将来を期待されながら、1928年ニューヨークを去り、アメリカの土地に再び帰って来ることは無かった。だがハーレム・ルネサンス期の成熟期にあって、カリブの島々の物語で見事に其の役割を果たした。

Bobert A. Boneは、Laficadio Hearnに影響を与えたPeirre Lotiとハーンとウオルロンドの共通性を論じ、ウオルロンドに与えた影響を明らかにしている。

The similarity of Hearn's life to his own must have been a source of

wonderment to Eric Walrond. Like himself, Hearn had been a cosmopolitan, belonging to no one nation or cultural tradition, but suffering the pain and bafflement multiple identities ... Above all, Hearn had cultivated a taste for the exotic that drew him to the West Indies. Was it any wonder that a young apprentice should eagerly devour the writings of a man whose life made so many points of contact with his own? [16]

具体的な確証は無いものの、ウオルロンドの初期のエッセイからその影響が類推できよう。更に、Robert A. Boneは、ウオルロンドの限界を見つめつつも次のような評価で、締めくくっている。

Yet despite its limitations, *Tropic Death* will be remembered as a notable achievement of the Harlem Renaissance. And it will be particularly treasured, by American Negroes of West Indian descent, as a pioneer attempt to grapple with the complex fate of hailing from the Spanish Main.[17]

確かに、Stering Brownが指摘するように"overwritten,""too oblique"[18]であることも確かであり、またHugh M. Glosterが言うように黒人労働者の"mistreat-ment"[19]でもあるかもしれない。だがウオルロンドのこのリアリスチックな拘りこそ、彼をカリブの島々の語り部にするには大切な要素であった。

Notes

1) Eric Walrond, *Tropic Death*, Boni & Liveright, 1926, New York, p.56.
2) Ibid., p.56.
3) Ibid., p.54.
4) Ibid., p.45.
5) Ibid., p.140.
6) Ibid., p.141.
7) Ibid.
8) Ibid., p.146.

9) Ibid., p.154.
10) Ibid., p.158.
11) Ibid., p.114.
12) Ibid., p.61.
13) Ibid., pp.76-77.
14) Ibid., p.259.
15) Ibid., p.206.
16) Robert A. Bone, *Down Home: A History of Afro-American Short Fiction from Its Beginning to the End of the Harlem Renaissance*, G.P Putnam's Sons, 1975, New York, p.187.
17) Ibid., p.203.
18) Stering Brown, *Negro Poetry and Drama and the Negro in American Fiction*, Atheneum, 1972 New York, p.155.
19) Hugh M. Gloster, *Negro Voices in American Fiction*, Russell & Russell, 1965, New York, p.181.